



今松 英悦氏

毎日新聞社 論説室論説委員

1974年毎日新聞社入社。東京本社編集局経済部副部長、同編集局編集委員等を経て2000年から論説室論説委員(担当はマクロ経済、財政、経済協力、環境経済等)。その他、金融審議会臨時委員、財政制度等審議会臨時委員、国際協力銀行円借款事後評価フィードバック委員会委員等。

対象事業

現地調査:2005年4月

モロッコ

■ アブダ・ドウカラ灌漑事業

チュニジア

■ 北部地域導水・灌漑事業

■ グベラート灌漑事業

■ バルバラ灌漑事業

感謝される北アフリカ支援～事業効果のいっそうの発現のため、無償援助や技術協力との連携を～

モロッコ、チュニジアにおける円借款事業の現場視察および、中間評価ワークショップに参加した。灌漑施設は完成したものの、導水までは行われていない状況での事後評価に先立つ中間評価は初めての試みであるということでおおいに期待した。開発途上国における基礎的産業である農業部門への援助がどのように行われ、その効果発現に至るプロセスがどうなっているかなども、現場から見たいと思っていた。そういった所期の目的はいずれも達成することができた。

今回はまず、モロッコのアブダ・ドウカラ灌漑事業を視察した。この事業はモロッコ最大の灌漑プロジェクトで、雨量の少ないこの地域における農業生産性を引き上げることを目的としている。本円借款事業は2002年9月に完成し、灌漑受益面積は1万8,900haと広大である。灌漑はすでに開始され、オリーブやトマトの栽培が可能となっただけでなく、小麦の収穫量も飛躍的に伸びていた。また輸入に大きく依存していた砂糖については国内需要の半分近くを供給できる体制となり、自給率の引き上げに大きく寄与していた。しかしながら、貿易の自由化が進むなかで農業部門の競争力強化が緊急の課題となっている。



モロッコ アブダ・ドウカラ灌漑地の受益者

一方チュニジアでは、テーマ別評価(中間評価)が進んでいる北部の灌漑事業を視察し、チュニス近郊で開催されたワークショップに参加した。テーマ別評価の目的は事業の現状が審査時の計画と比べてどのような状況にあるのか、事業が所期の効果を

発現するに際しての障害は何かなどを、OECD/DACの基準に基づいて検証するものである。事業の妥当性、効率性に問題はなく、有効性において受益面積が審査時の計画と比べて増加していることは高く評価してよい。農業・水資源省担当次官、県知事、農民、NGO等が参加したワークショップでは、灌漑施設が完成した今、事業を成功させるためにすべき行動計画について議論が行われた。灌漑農業の振興は大統領の強い意向でもあることから、政府や県は水利組合への技術指導、農民の必要資金調達の円滑化、土地所有権の明確化といったすべての行動計画を実施する意気込みを見せていた。



チュニジア北部の灌漑地の受益者

モロッコ、チュニジアは円借款の年次供与国[※]であり、円借款で主産業である農業への援助を行っている意味合いは両国の経済発展を土台から支えていこうということである。返済義務をとまなう円借款は、経済発展がある程度に達した国においては自立性を高めるうえで有力な手法であるが、わが国としては無償資金協力、技術協力とも組み合わせることにより事業効果の発現をより顕著なものにすることもできる。

ドナーは受け入れ側の経済自立や社会改革を手助けするのであり、その成果が発現した結果、ドナーに対して感謝の念をもつのであれば自然である。チュニジアでも灌漑が日本の円借款で行われていることは認知されている。援助事業から農民が恩恵を受けることになれば自ずと感謝の念も高まることになるだろう。

[※] 当該国から円借款の要請があった場合、円借款供与の検討を毎年度行う国

(テーマ別評価 チュニジア「総合的水資源管理」については、P81を参照ください。)